

重紐をめぐる幾つかの問題(3)  
—『顔氏家訓』「音辞篇」の重紐例—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

中村：今回は重紐の対立を甲類・乙類あるいはA類・B類と呼ぶようになった経緯について概観しました。甲類・乙類と呼んだ最初は、日本の研究者による河野六郎(1939)<sup>1</sup>で、3等(甲類)と4等(乙類)ではなく、3等(乙類)と4等(甲類)としたのは、上代日本語の研究である橋本進吉(1931)<sup>2</sup>の万葉仮名研究において、万葉仮名の甲類に重紐4等字が対応し、乙類に重紐3等字が対応する場合が目立つことに依ったものです。

他方、重紐の対立をA類・B類と呼んだ最初は、中国の研究者による周法高(1945)<sup>3</sup>です。3等(A類)と4等(B類)ではなく、3等(B類)と4等(A類)としたのは、陳澧の『切韻考』「本編の表」の韻字配列の影響です。4等を先にし、3等を後にして、甲類・乙類、A類・B類を配したのは、それぞれ先行文献の影響と見てよいということでした。

吉池：先行文献の影響が主たる要因なのでしょうが、それを受け入れる素地が、推定音価自体の中にあっただとも言えます。有坂秀世氏、河野六郎氏、王静如氏は、重紐の対立を介音の違いに求めます。有坂秀世(1935)<sup>4</sup>や有坂秀世(1936)<sup>5</sup>は、重紐4等の介音を前舌性拗音とし、重紐3等の介音を中舌性拗音とします。そうすると、4等の前舌性拗音を先に書き、3等の中舌性拗音を後に書くのは、文章表現の上で自然な事でしょう。王静如(1941)<sup>6</sup>は、

---

<sup>1</sup> 河野六郎(1939)「朝鮮漢字音の一特質」『言語研究』3、1939年。『河野六郎著作集2 中国音韻学論文集』平凡社所収、1979年、155-180頁による。

<sup>2</sup> 橋本進吉(1931)「上代の文獻に存する特殊の假名遣と當時の語法」『國語と國文學』第八卷・第九號、1-24(1151-1174)頁。

<sup>3</sup> 周法高(1945)「廣韻重紐的研究」『六同別錄』上冊(李莊：中央研究院歷史語言研究所、1945年)、1-62頁。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本、49-117頁、1948年所収。『六同別錄』は前回の対談の後に太田齋氏より複写を借用し1948年本との間に特段の異同がないことを確認した。また、その際、発行地が台北ではなく四川南溪県李莊鎮であることも判明したので、ここに訂正する。

<sup>4</sup> 有坂秀世(1935)「萬葉假名雜考」『國語研究』第3巻第7号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収、1980年第7刷、557-561頁による。

<sup>5</sup> 有坂秀世(1936)「漢字の朝鮮音について(下)」『方言』第6巻第5號。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収「漢字の朝鮮音について」(上、下を合わせたもの)、1980年第7刷、303-326頁による。

<sup>6</sup> 王静如(1941)「論開合口」『燕京學報』第29期、1941年、143-192頁。

重紐4等の介音を「前」もしくは「強」とし、重紐3等の介音を「後」もしくは「弱」とします。そうするとやはり、「前後」・「強弱」という文章表現に依り、4等を先にし、3等を後にするというのも自然な心情でしょう。

他方、周法高(1945)は、文献の各所で「B類要比A類的元音開些」(B類の母音はA類よりもやや開いている)とし、重紐A類とB類の違いを主母音の広狭に求め、3等(B類)に広めの母音、4等(A類)に狭めの母音を想定します。これから、どちらが先か後かは認めにくい。しかし、少なくとも、有坂氏、河野氏、王静如氏などのように介音の「前後」「強弱」などの違いとする場合は、4等(甲類、A類)・3等(乙類、B類)を受け入れる下地が、各自の推定音価の性質(あるいはその呼称)それ自体の中にあるとみて良いかもしれないとしました。

中村：以上は前回の議論の概略ですが、今回は、重紐が音の違いであることを示す好例としてしばしば取り上げられる『顔氏家訓』「音辞篇」の重紐例を確認しましょう。

## 2. 『顔氏家訓』の記述

吉池：『顔氏家訓』は六朝末の文人顔之推の著作です。顔之推の没年は600年以前で、590年頃の成書とされます。王利器(1980)『顔氏家訓集解』に、豊富な注記があるので、『集解』の注記を利用しながら議論を進めましょう。『顔氏家訓』の「音辞篇」に次のようにあります。

「璵璠，魯人寶玉，當音餘煩，江南皆音藩屏之藩。岐山當音爲奇，江南皆呼爲神祇之祇。」

これを日本語にし、ピンインを参考として付すと次のようです。

「璵璠(fán 奉母)は魯人の寶玉、正しくは餘煩(fán 奉母)と読むべきところ、江南では皆、藩屏の藩(fān 非母)と読む。岐(qí 群母)山は、正しくは奇(qí 群母, jī 見母)と読むべきところ、江南では皆、神祇の祇(qí 群母)と読む。」

中村：寶玉の読み方も、岐山の読み方も、顔之推の判断では、江南の誤とするようです。寶玉の方は声母の違いです。問題は岐山の読み方です。岐山の岐の読み方の記述によって、少なくとも、奇と祇の読音が異なっていたことはわかります。しかしこれだけだと、どのような違いかわかりません。

## 3. 奇と祇の読音の違い

吉池：切韻系の韻書の集大成と位置づけられる宋代の韻書『大宋重修広韻』(以下、『広韻』と呼ぶ)によると、平声の第五支韻の中に、次のように○を付した同音の漢字が並んでいます。それぞれの反切の音に相当するピンインを参考までに付します。下線      は対談者によるものです。

- 奇 渠羈切 qí 又居宜切 jī 十 琦 騎 鷓 弭 魁 碕 岐 敕 錡
- 祇 巨支切 qí 二十五 示 祇 岐山名 岐 郊 駢 ……省略……
- 羈 居宜切 jī 九 畸 羈 倚 敝 奇 ……省略……

中村：○の後に列挙した字は同音のグループですね。これを“小韻”（しょういん）と呼び、最初の字、奇、祇、羈を“小韻代表字”と呼ぶ習慣です。小韻代表字には、反切と、同音字の数、が付されます。奇以下 10 の漢字が同音で qí (群母) です。奇だけが別に居宜切 jī (見母) という音、いわゆる“又音”（またおん）を持っており、その又音は、羈居宜切 jī (見母) の下に奇として出てきます。

吉池：奇に qí (群母) と jī (見母) の二音があるというのは、「音辞篇」の文の理解を複雑にしますね。

中村：顔之推の判断によると、岐 (=祇) は、河北では正しく奇と読み、江南では誤って祇と読むとのこと。 「奇」と「祇」の違いを、所謂重紐による違いと理解するのが普通です。つまり、両方とも「奇 qí (群母 3 等)」と「祇 qí (群母 4 等)」であり、現代諸方言では同音になるため、その区別がどこにあるかを問題にするわけです。

吉池：ふつうは、「奇」を重紐 B 類、「祇」を重紐 A 類とし、重紐に関わる相異としますね。

#### 4. 奇 jī (見母) と祇 qí (群母)

中村：しかし、重紐の違いではないとする理解もあります。宇都宮清吉訳注『顔氏家訓 2』(平凡社、東洋文庫、1990 年) は、奇 jī (見母) と祇 qí (群母) の違い、すなわち、重紐とは無関係の声母の違いと見ます。確かに奇には見母の音もあるので、声母の違いとする解釈も不可能ではありません。しかし、見母の音を示すのにわざわざ奇を用いるのはやや無理があるかと思います。

吉池：『広韻』に登録された岐の声母は群母のみです。韻書の義注にも登場するほどの有名な山名について、群母/g-/と見/k-/という明瞭な違いの二つの読みがあったと想定するのは、たしかに無理があります。宇都宮氏は、どうして重紐の違いでなく、声母の違いとしたのでしょうか。

中村：宇都宮氏は、漢字音にカールグレン氏の中古音を利用します。カールグレンは重紐の違いを認めないので、奇(群母)と祇(群母)は同音となります。そこで、奇 jī (見母) と祇 qí (群母) の違いとすることで合理性を保持したのではないのでしょうか。しかし、後で見るよう

に、『広韻』以前の切韻系韻書や經典釈文の記述から、問題になるのは奇(群母)と祇(群母)の違いであることは明らかです。

## 5. 顔之推と広韻との齟齬

吉池：岐(群母)、奇(群母)、祇(群母)の韻図『韻鏡』での位置を見ると、奇(群母)は3等欄に、祇(群母)は4等欄に置かれており、何らかの音の違いであると想定するのが自然です。なお、『広韻』では、祇(群母)の小韻のなかに岐があるので両者は同音です。このような『広韻』と韻図の情報を「音辞篇」の一節に当てはめると次のようです。

「岐山の岐は、正しくは奇(群母3等)と読むべきところ、江南では皆、神祇の祇(群母4等)と読む。」

中村：つまり、“岐山の岐は、【河北では】正しく奇(重紐B類)と読み、江南では【誤って】神祇の祇(重紐A類)と読む。”ということです。

吉池：現存の『広韻』では岐=祇(重紐A類)であり、顔之推が正しいとする岐=奇(重紐B類)ではない。顔之推と『広韻』の間には、齟齬があるということですね。

中村：そのことについて、王利器(1980)『顔氏家訓集解』の注記が、錢大昕と周祖謨の見方を紹介します。

## 6. 錢大昕の見方

中村：先ず錢大昕の見方から確認しましょう。錢大昕(1799)<sup>7</sup>は、『十駕齋養新録』の「翻切古今不同」において次のように述べます。

古書では支と氏は通じており、江南音に誤りはない。広韻では祇と岐は同じ紐(=小韻)であり、正しく江南音を用いている。これは陸法言【切韻の著者】が、顔之推の説を全て採用したわけではないことを示す<sup>8</sup>。

吉池：錢大昕は、『広韻』の岐=祇が正しいとし、陸法言は顔之推の岐=奇に従っていない。即ち、切韻の序に「蕭該と顔之推が中心となり決定をみるが多かった」とあるけれども、その顔之推の考えに従っていないとします。もっとも、「従ってない」などと意味ありげな言い方をしましたが、錢大昕は何を意図して「翻切古今不同」の一文を記したか、慎重でなければなりません。単に、個別の字音について、両者に違いがあるという事実を指摘したに過ぎないのかもしれない。

<sup>7</sup> 錢大昕(1799)「翻切古今不同」『十駕齋養新録』(自序嘉慶四年[1799])。台湾商務印書館の国学基本叢書王雲五主編、1967年印行本による。

<sup>8</sup> 「古書支與氏通。江南音不誤。廣韻祇岐同紐，正用江南音。是法言亦不盡用顏說。」

中村：その点についての理解の便の為に、切韻の序（序年は仁寿元年[601]）を確認しておきましょう。

## 7 切韻の編纂者

中村：隋の開皇（581年～600年）の初め、顔之推を含む8人の文人が、陸法言の家に集まり、酒を酌み交わしながら、諸家の韻書や注音について論じあったとのこと。その際、蕭該と顔之推が中心となり決定をみるが多かった。集まった一人である魏彦淵が陸法言に向かって言った。『従来の疑問や論点はすっかり出尽くしたようであるから、話のとおり記録しておいてはいかがであろう。我等数人が定めたものであるから、これはもう定論であると称してよい』と。これによって陸法言が筆をとり梗概を書き止め、十数年の後に、記しておいた梗概に依って切韻五巻を作った（大意）、とあります。

吉池：平山久雄(1988)は<sup>9</sup>、切韻の序に、陸法言の父の名は出ないけれども、法言の父親である陸爽が実際の主催者で、8人が集い、その場に子の陸法言が陪席していたとします。

たしかに、陸法言が主人だとすると、招かれた客が、話し合った結果の梗概を、主人に書き付けるように言ったことになり、酒席の上とはいえ、ぶしつけですね。やはり平山(1988)にあるように、法言の父陸爽が、主宰し、8名を招き、陪席していた子の陸法言に、梗概の書きつけを依頼したとするのが自然です。

中村：その点に関わることですが、平山久雄(1988)は更に大胆な想定をします。「陸法言が官職を免ぜられてから『切韻』を編纂して序を書くまで、最大に見積もっても一年余りしか経っていない。身辺の様々な変化が落ち着いて彼は早速編纂の仕事にとりかかったと思われる。想像を逞しくすれば、実は陸爽の手によって既に『切韻』の手稿が出来ており、陸法言はそれをあたかも自己の著作であるかに装って序を書いたのであったかも知れない。」

(22頁)

吉池：会合(酒宴)を主催した父陸爽が『切韻』に手を入れたと想定するのは自然なことです。『切韻』の編纂に関わった陸爽と陸法言の程度は不明ですが、『切韻』は父子の共著と見て良いのでしょうか。

## 8 開皇初めの集いから切韻の序まで

中村：『切韻』の序までの出来事を、時系列に沿って見ると、①開皇(581年～)の初めの集い(酒宴)→②顔氏家訓(590年頃の成書)→③切韻の序(仁寿元年[601])となります。そう

---

<sup>9</sup> 平山久雄(1988)「『切韻』序と陸爽」『開篇』6、17-24頁。

すると、顔氏家訓(590年頃の成書)の「音辞篇」には、開皇(581年)の初めの議論が反映している可能性があります。そのような見方に立つと、『切韻』の在り方を決定した重要人物であった顔之推の判断に、陸法言は「従っていない部分がある」ということになるのでしょう。ただ、開皇(581年～)の初めの集い(酒宴)で、個別の字音についてまで議論したかどうか疑問ですね。

吉池：たしかに、韻書の検討が目的の集い(酒席)であったとしても、字音の細かい点まで話し合ったと想定しなくても良いのでしょう。重紐が河北音にも江南音にも有ることは前提の上で、岐の字音がA類であるかB類であるかなどの個別の字音の所属について、陸法言と顔之推に異なる部分があったとしても、ことさら取り上げるようなものではないかもしれません。

中村：ところで、①開皇(581年～)の初めの集い(酒宴)においては、言うまでもなく、分韻など、作るべき韻書の概略は話し合われたことでしょう。それ以外に、既存の韻書のどの反切を採用すべきか、反切の上字と下字の選択の方針についても、これは韻書の実質となる重要な部分でもあるので、話し合われたかもしれません。

吉池：これはやや突飛な想像ですが、陸爽と陸法言父子が、切韻の編纂において、頭を悩ませた作業の一つは、梗概の方針に依って反切の上字と下字の選択をする、即ち重紐に関わる反切の上字と下字の調整をする作業にあったかもしれません。

ところで、周祖謨(1966)はどのようでしょう。

## 9. 周祖謨の見方

中村：周祖謨(1966)<sup>10</sup>には次のようにあります。

切韻の、奇：渠羈反と、祇：巨支反の二字は、共に支韻の群母字であるが、韻図での等位は異なる。奇は3等で祇は4等。切韻の岐山の岐には、巨支と渠羈の二つの反切がある(王国維の抄本の切韻第二種や、故宮本の王仁昫切韻も同様である)。易経の升卦に「象曰：王用享于岐山」とあり、釈文(経典釈文)に「岐は其宜反、或いは祁支反」とある。二音があり、祁支は巨支、其宜は渠羈である。顔之推は、河北と江南では読音が異なると、その概略をのべているのである。原本玉篇を見ると岐を渠宜反とする。これは江南に奇とする読音のあることを示すものである<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> 周祖謨(1966)「顔氏家訓音辞篇注補」【もと1944】『問学集 上冊』北京：中華書局、1981年の第2次印刷、405-433頁による。

<sup>11</sup> 「切韻奇渠羈反，祇巨支反，二字同在支韻，皆群母字，而等第有差。奇三等，祇四等。切韻岐山之岐，音巨支渠羈二反，見王抄切韻第二種，故宮本王仁昫切韻同。易升卦「象曰：王用享于岐山」，釈文云：岐其宜反，或祁支反。亦有二音。祁支即巨支，其宜即渠羈也。顔云河北江南所讀不同，亦言其大略耳。考原本玉篇岐即作渠宜反，是江南亦有讀奇者也。」422-

これを要するに、『切韻』では、「奇」は渠羈反（3等）で重紐B類、「祇」は巨支反（4等）で重紐A類であった。「岐」については重紐A類とB類の二音があった。そのことは、切韻残卷写本の第二種や、故宮本の王仁昫切韻や、經典釈文で確認することができるということです。

吉池：岐の字音について、錢大昕のように、ことさら顔之推と陸法言の違いに言及することはなく、事実だけを述べているように見えます。

中村：ただ、切韻残卷写本の第二種や、故宮本の王仁昫切韻については確認が必要です。

#### 10. 切韻第二種と故宮本王仁昫切韻<sup>12</sup>

吉池：切韻残卷写本の「第二種」は所謂「切二」（S2055）であるとして、周氏が言う故宮本の王仁昫切韻は、所謂「王一」「王二」「王三」の内「王二」を指すのでしょうか。周氏が依ったと思われる『十韻彙編』（三版 1973）<sup>13</sup>の9-10頁によると、切二の奇：渠羈反の下に岐は無く、祇：巨支反の下に岐が有ります。これは広韻と同様です。ただし、祇小韻の下の岐には「山名又渠羈」とあります。「又渠羈」は「又渠羈反」の意と解釈できますから、韻字としては祇の小韻にしか収められていないけれども、岐には「巨支反」のほか「渠羈反」の音もあったこととなります。一方、王二には、奇：渠羈反および祇：巨支反の両者の下に岐があり、こちらの方がより明確に岐に2種の音があることが分かります。

なお、切一、切三、王一は該当する部分を欠くので確認はできません。王三については、『十韻彙編』は収めません。そこで、写真を収める周祖謨(1983)<sup>14</sup>によると、王二と同様です。そうすると、王本には岐に重紐B類(三等)と重紐A類(四等)の二音があり、重紐A類(四等)のみの『広韻』とは異なっていたということになります。

中村：まとめると、王仁昫切韻では明確に岐に巨支反（A類）と渠羈反（B類）の二音があり、切二においても、韻字としては祇の小韻にしかないが、又音注記を考慮すれば、A類とB類の二音があったと見なしてよいということですね。

---

423。

<sup>12</sup> 上田正(1973)『切韻残卷諸本補正』東京：東洋学文献センター刊行委員会による資料呼称と簡称は次の通り。S2683（切一）、S2055（切二）、S2071（切三）。P2011（王一）、内府本刊謬補缺切韻（王二）、全本王仁昫刊謬補缺切韻（王三）。

<sup>13</sup> 『十韻彙編』国立北京大学研究院文史部編、魏建巧序 1936年。劉復編著台湾学生書局出版第3版 1973年による。

<sup>14</sup> 周祖謨(1983)『唐五代韻書集存 上・下』中華書局。

吉池：そうすると、陸法言が必ずしも顔之推に従っていないという錢大昕の見方についても、やや注意が必要です。広韻では岐に巨支切（A類）の音しか認めていないのですが、陸法言の原本切韻が岐に巨支反（A類）と渠羈反（B類）の二音を認めているとすれば、顔之推のように岐をB類とする見解も排除されていないことになります。<sup>15</sup>

中村：その場合、広韻（もしくはその基となったヴァージョン）では原本にあった又音（渠羈反）を削除して、岐にB類の音を認めないと判断したわけです。

#### 11. 「音辞篇」の用例の利用について

吉池：いずれにしても、「岐」を、顔之推は重紐B類とし、陸法言は重紐A類とし、両者は「岐」の字音の処理を異にしたということは事実です。

中村：広韻の「奇」に群母と見母の二音があったことと、王本で「岐」に重紐のA類とB類の二音があったため、やや複雑な様相となります。しかし、「奇」と「祇」を別の音としているという点は、顔之推も陸法言も同じであると見てもよさそうなので、重紐を音の違いとする議論の出発点として『顔氏家訓』「音辞篇」の例を使うことができそうだ、ということを確認しました。

吉池：今回は中身のある議論ができませんでしたが、ふだん素通りされる場合が多い「音辞篇」の例に就いて、議論することができたので良しとおきましょう。

---

<sup>15</sup> いくつかの原本切韻の復元作業においても祇小韻の岐の注は「山名又渠羈反」と復元されている。

cf. 藤田拓海（2023）『陸法言『切韻』研究』（好文出版、中國語學研究開篇単刊 No. 18）